

儀礼の器 商周青銅器

令和4年9月17日(土)～令和5年3月12日(日)



兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

青銅礼器

中国における青銅(*1)器は、紀元前18世紀頃に出現する。それは王朝の誕生とも関連し、その後国家が形成される過程で青銅器の制作技術は著しく進歩し、精巧な優品が出現する。

商(殷)時代(*2)(紀元前17世紀頃～紀元前11世紀頃)は、青銅器の制作が本格化し、最盛期を迎える時代である。そして制作された青銅器の多くは日常生活とは無縁の宗廟(*3)に備えられ、王たち支配階層の人々が神々を祀る儀礼の場で用いる礼器だった。礼器は用途により酒器、食器、水器等に分類されるが、儀礼では飲食物を神に供え饗宴を伴うことから特に酒器と食器が発達している。

古代中国の礼器は、高度な鑄造技術を用いて制作されたことに特色があり、古代中国の思想を象徴するものである。



獸面紋卣



商時代前～中期の青銅酒器

さまざまな形 —酒の器—

青銅礼器の中で酒に関わる器は、青銅礼器が出現した当初から存在し、その種類も多い。商時代は、祭祀・儀礼と政治が一体化し、酒が重要な役割を持っており、神とともに飲酒する中で王や国家の意思決定が行われた。

酒器の種類

- 酒を温めるための器 …………… 爵・斝・角
- 酒を飲むための器 …………… 觚
- 酒を容れるための器 …………… 卣・尊・方彝

爵 [しゃく] 温める

筒状の胴部に3本の足と把手(鑿)がつく。口縁部には長い注ぎ口(流)、その反対側に尖った尾をもち、注ぎ口の付け根に柱がある。二里头文化(*4)の時代に出現した最も古くからある青銅礼器である。商時代を通じてさかんに用いられるが、西周時代中期頃には姿を消す。

青銅器は土製の鑄型(範)を用いて鑄造する。複雑な形の器は鑄型の分割が難しい。爵は平底から丸底へ、その器形の変化から鑄造技術の発達過程を見ることができる。



乳釘紋爵(商前期)
高13.8cm(館蔵品)



獸面紋爵(商前期)
高18.7cm



獸面紋爵(商後期)
高25.5cm



獸面紋爵(商後期)
高20.6cm



斝 [か] 温める

筒状の胴部に3本の足と把手(鑿)、口縁部に2本の柱がつく。爵と同様の用途をもつが、爵よりも大型で、口縁部は円く、注ぎ口や尾を持たない。商時代中期頃に出現し、商時代の儀礼の中で重要視されるが、西周時代には衰退する。

獸面紋斝(商前期)
高23.0cm



獣面紋角(商後期)
高22.4cm

角 [かく] 温める

爵に似た器形で、口縁の両端が尾のように均等に尖り、注ぎ口と柱がない。商時代後期に出現するが、出土例は少ない。爵と同様に酒を温める用途と推定されるが、役割のちがいは不明である。

觚 [こ] 飲む

細長い胴部に大きく広がる口縁と高く末広がり脚台(圈足)が特徴の酒杯。爵とともに商時代には大量に制作されるが、西周時代になると衰退する。



獣面紋觚(商後期)
高32.8cm



獣面紋卣(商中期)
高24.4cm

卣 [ゆう] 容れる

壺状の胴部に蓋と釣り手(提梁)が付き、酒を容れて持ち運ぶための器と推定される。商時代中期頃に出現し、器形は縦長のものから下ぶくれの胴部で横断面が楕円形のものに変化する。



獣面紋卣(商後期)
高29.5cm



獣面紋尊(商後期)
高20.0cm

尊 [そん] 容れる

尊は酒を容れる器の総称であり、形にもバリエーションがある。展示作品は、口縁が大きく開き、脚台(圈足)をもつ。肩部が強く張り、胴部との境が屈曲する器形。

方彝 [ほうい] 容れる

直方体の身に屋根形の蓋がつき、その中央につまみがある。複雑に鑄型を組み合わせ制作する。



獣面紋方彝(商後期)
高29.0cm

さまざまな形 —食の器—

神を祀る儀礼の中で出される食事には、穀物を炊いたもの、肉や骨を煮込んだスープなどがあり、食器には、食事を調理するための煮炊器、調理した食物を盛り付けるための盛食器がある。

食器の種類

- 煮炊きするための器 鼎・鬲
- 食を盛るための器 簋・盤

鼎【てい】 煮炊

一对の把手(耳)と3本の足が付いた鍋。主に動物の肉を煮てスープを作るための器で、器形は新石器時代の陶器に祖型がある。商・周時代を通じて多量に制作され、宗廟に安置する大型のものもある。祭祀の中で重要視される器だが、西周時代には「禹の九鼎」(*5)の伝承のように所有者の権威・身分を象徴する器となり、他の礼器が衰退する中で長く後世まで残った。



弦紋鼎(商前期)
高17.7cm(館蔵品)



鳥紋鼎(商後期)
高20.4cm



獸面紋鼎(商末期)
高53.0cm



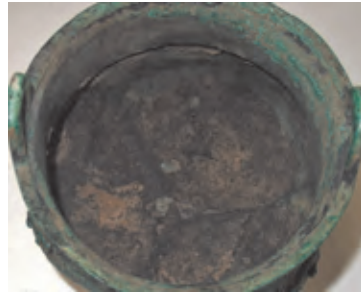
方鼎【ほうてい】 煮炊

方形の器形の鼎で4本の足がつく。用途は円形の鼎と同様に肉を煮てスープを作るものとされる。商時代後期～西周時代前期にかけて制作されるが、その数は多くない。複数の鑄型を組み合わせ、円形の鼎とは異なった技術で制作される。

獸面紋方鼎(商末期)
高23.3cm

鬲 [れき] 煮炊

鼎に似て一対の把手(耳)と3本の足が付く器。足は袋状を呈する。用途も鼎同様に穀物や肉の煮炊きや湯を沸かすのに用いられたと推定される。新石器時代以降に日常の器として用いられた陶器に祖型があり、それを模して商時代中期頃に青銅礼器として出現し、西周時代にさかんに制作される。



鬲の内面



獸面紋鬲(商中~後期)
高19.4cm

簋 [ぎ] 盛る

穀物を盛りつけるための深い鉢形の器。商時代後期に出現し、盛食器を代表するようになる。商時代のものには把手を付ける例がなく、西周時代に入って把手が付いた例が一般化する。西周時代以降、鼎とともに所有者の権威や身分を象徴する器として重要視される。



獸面紋簋(商後期)
高14.3cm



ほうかくにゅうていもん
方格乳釘紋簋(西周初期)
高15.9cm



盤 [ばん] 盛る

円形の浅い鉢で脚台(圈足)が付く。盤は一般的に水を扱う水器のうち、手を洗う際に水を受ける器を指すが、展示作品は食物をすくう^ひビ(スプーン)を伴うため、盛食器として用いられたと推定する。内面には亀・鳥・獸の紋様を凹線で表す。

龜紋盤(商後期)
高21.4cm

青銅礼器を飾る紋様

青銅器の表面には、凹凸によって紋様を表す。それは、装飾するだけのものではなく、信仰の意味合いが強いと考えられている。青銅礼器が登場した当初は、細い凸線(弦紋)など単純な紋様のみを表していたが、商時代前期以降は獣面紋をはじめとする動物の紋様が出現し、次第に複雑な紋様が器面全体を覆うように表される。

獣面紋(饕餮紋)【じゅうめんもん(とうてつもん)】

大きくにらむ目と威嚇するような角、大きな鼻を有する顔面を中心とした動物紋。中国古代の青銅礼器を象徴する紋様である。魔除けの役割を担うと考えられている。後世の古典の記述によるとその正体は貪欲な怪物である饕餮(*6)に比定されているが、天帝(最高神)とも解釈されている。



獣面紋(獣面紋罍)



獣面紋(獣面紋鼎)



獣面紋(獣面紋方鼎)



龍紋(獣面紋卣)



鳥紋(獣面紋卣)

龍紋

龍は、その初現が新石器時代まで遡る中国の伝統的な想像上の動物で、は虫類など複数の動物の部位を組み合わせて表されている。その紋様は商・周時代に一般化し、発達する。青銅礼器の中では多様な姿で獣面紋の従者のように表される例が多い。ここに示した例はワニのような口で後ろを振り返る姿を表す。

鳥紋

青銅礼器に表された鳥は、実在の鳥やそれらの部位を組み合わせた想像上の鳥など多様な姿をしており、後世の鳳凰の祖型ともされる。商時代には龍紋とともに発達し、獣面紋の従者のように表されるが、西周時代には主紋様としても表されるようになる。本例は龍と同じ体で頭が鳥の姿で表される。

その他の紋様



蝉紋(鳥紋鼎)

蝉紋【ぜんもん】

蝉^{せみ}を象った三角形の紋様。生命の再生を象徴する紋様と推定される。



雷紋(獸面紋方彝)

雷紋【らいもん】

方形の渦巻きが連続する中国の伝統的な幾何学紋様。商時代後期には地紋として主紋様の隙間を埋め尽くす。

青銅礼器のうつろい

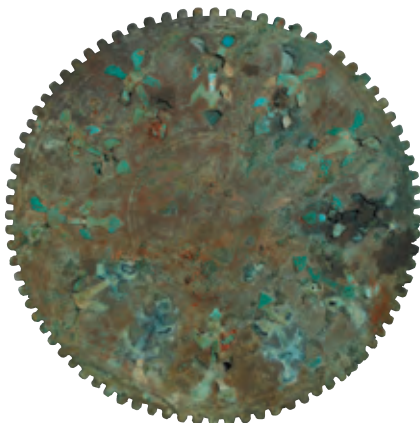
紀元前11世紀頃、商王朝は滅亡し、西周王朝が成立する。王朝が交代してもしばらくは青銅礼器に大きな変化はみられず、西周王朝が商王朝の伝統的な儀礼や青銅礼器の制作を引き継いだと考えられている。

しかし西周王朝の体制が整備される中で祭祀・儀礼が変化する。商時代に重要視された酒器は総体的に減少する一方で、食器の比重が高まっていく。器面の紋様も獣面紋からその従者だった龍・鳥紋が主役となる。

西周王朝は、商王朝が「酒池肉林^(*)」の伝承のように酒にふけり滅亡に至ったとの認識をもち、儀礼の内容の変革とあわせて酒器の衰退に影響を与えたとも推定されている。そして、青銅礼器は儀礼の場で用いるものから、社会秩序を維持するためのものへと変化する。

商・周時代以前の銅鏡

青銅器の出現と前後して、銅鏡の制作も始まる。しかし、商・周時代には青銅礼器が数多く制作されるのに対し、銅鏡の数はまだ少ない。また、王らが行う祭祀や儀礼の中で用いられることはなかった。



緑松石象嵌鋸齒縁鏡
二里头(夏) 径21.8cm
(館藏品)



鋸齒縁鏡
商 径16.3cm
(館藏品)



星形紋鏡
商 径13.6cm
(館藏品)

用語解説

*1 青銅【せいどう】

銅に錫を混ぜた合金。融点が銅より低くなり、鑄造しやすく、耐久性がある。銅と錫の混合比は制作する器物に適した性質となるように変える。

*2 商(殷)時代【しょう(いん)じだい】

夏王朝を倒して成立したとされ、中国で実在が確認される最初の王朝の時代である。「商」は同時代の出土文字資料で用いられる王朝の中核的な都市の名称であり、自らの王朝も「商」と称していた。歴史家である司馬遷が著した『史記』(前漢時代)等では「殷」と呼称される。

*3 宗廟【そうびょう】

祖先の霊を祀るための施設。

*4 二里头文化【にりとうぶんか】

黄河中流域に広がる新石器時代と商(殷)時代間の文化。名称は二里头遺跡による。中国の青銅器時代が始まる時代にあたり、中国最初の王朝である夏王朝の時代とも推定される。

*5 禹の九鼎【うのきゅうてい】

夏王朝の始祖である禹が国内産出の銅をもとに9つの鼎を鑄造したという伝承。王朝交替とともに夏から商、西周と継承された9つの鼎は、王朝の権力を象徴する器物とされた。

*6 饕餮【とうてつ】

食物や財産を食らう貪欲な怪物。ただし古典文献に記載された名称で、青銅器に表された紋様がそれを表したものは明かではない。

*7 酒池肉林【しゅちにくりん】

語源は『史記』から。商王朝最後の王である紂は「酒をついで池となし、肉をかけて林となす」ほど遊びにふけり、その結果、徳を失って王朝が滅亡したとする伝承。

展示関連年表

	紀元前20世紀	紀元前17世紀	紀元前15世紀	紀元前11世紀	紀元前8世紀
中国	新石器時代	二里头文化 (夏)	商(殷) 前期 中期 後期	西周 前期 中期 後期	
日本		縄文時代			弥生時代

展覧会関連講演会

時間/13:30~15:00 会場/古代鏡展示館 2階会議室
定員/先着20名 対象/中学生以上

令和4年
10月1日(土)

要予約 予約/9月3日(土)~
「中国古代の飲食儀礼 —青銅器の種類と使い方」
講師/岡村秀典(京都大学人文科学研究所教授)

令和4年
12月10日(土)

要予約 予約/11月12日(土)~
「中国青銅器に親しむ」
講師/長濱誠司(当館事業課長)

*掲載の作品のうち特記のないものは千石唯司氏所蔵品